

豪雨予測もとに 道路や河川監視

豪雨予測もとに道路や河川監視
阪大 大阪府が実証実験
大阪大と大阪府などは6日、新型の気象レーダーを活用した「ゲリラ豪雨」の発生予測をもとに、府職員が道路の冠水や河川の増水など計15カ所について、監視や初動対応に取り組み実証実験を始めた。

大阪府が実証実験
大阪大と大阪府などは6日、新型の気象レーダーを活用した「ゲリラ豪雨」の発生予測をもとに、府職員が道路の冠水や河川の増水など計15カ所について、監視や初動対応に取り組み実証実験を始めた。

国士交通省のレーダーや、地上に設置された雨量計のデータも使い、道路の冠水や河川の増水の量などを予測する。予測結果は府庁や出先機関にメールで知らせるとともに、ランプを点灯させて職員に注意を促す。府によると、早ければ降り始める30分ほど前に予測できそうだという。

実験は来年度までの予定。今年度は周囲より低い場所があり、冠水の恐れがある道路7カ所、各地の下水道のポンプ場、府北部の千里川を監視する。

ゲリラ豪雨予測 精度確認の実験

大阪府、2年かけ

最新型気象レーダー

本事務所など10カ所で利用し、精度を確認する実証実験を始めた。同レーダーは従来より早い降雨予測が可能で、府は将来的に道路や河川の水害予防に役立てたい考えだ。実験期間は2年間で、府は池田市などの土木事務所のほか大阪府庁など10カ所に予測情報を受け取る端末を設置。水害の恐れがある15カ所について同レーダーがゲリラ豪雨の発生を予測した場合、アラームが鳴り府は降雨量などを記録する。

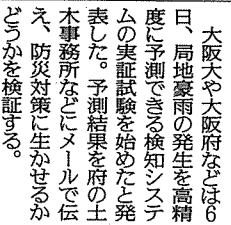
に設置されており、半径15〜60キロの積乱雲を3次元構造で観測。従来は5〜10分かかっていた観測時間を30秒以内に短縮でき、ゲリラ豪雨の発生を10〜30分前に予測できるという。

日経. 7/7(火). 朝. 35面

朝日. 7/7(火). 朝. 33

局地豪雨事前察知へ

阪大など 電波照射レーダー駆使



大阪大や大阪府などは6日、局地豪雨の発生を高精度に予測できる検知システムの実証実験を始めた。府の土木事務所などにメールで伝え、防災対策に生かせるかどうかを検証する。

レーダーは2基使用。大阪府の土木事務所など10カ所

大阪大や東芝などが2012年に開発し、阪大吹田キャンパス(大阪府吹田市)内の工学研究科棟屋上に設置されている「フェーストアレイ気象レーダー」。

ね返ってきた電波から、雨雲の位置や局地豪雨をもたらす積乱雲の発達過程を30秒以内に観測できる。もう一つは降雨量を正確に観測できるMPレーダーだ。

試験では、阪大などが一つのレーダーを開発した牛尾知雄准教授(電磁波工学)は「どういった情報の出し方をすれば防災に役立つかを調べ、18年ごろをめどに実用化したい」と話している。

このレーダーのデータを解析し、「〇〇市で何分以内に豪雨が発生」などの情報を府の土木事務所など10カ所にメールで伝える。豪雨が予測される地域を色付けした地図も添付するとい

読売. 7/7(火). 朝. 2